



昨日、関東地方の梅雨入り宣言がでました。この頃は雨が続き、湿気が感じられ、外出も気乗りがしませんし、気分も湿っぽいような感じです。でも、部屋の中の、お友達から頂いた紫陽花の爽やかなブルーのグラデーション、緑色の葉の力強さ、ストケシアの薄紫色の優しさが、しっとりと慰めを与えています。

そうです！今日は私たちの結婚記念日なのです。長い旅路を共に歩いて、穏やかにこの日を迎えられることに感謝しています。

先日、「日本の移植医療環境整備と移植医療の普及をもとめます」というキャンペーンのラインが届きました。2年前に、心臓の移植手術を受けた女性のことをすぐに思い出しました。心臓移植は「脳死」した人が、臓器を提供する意思を示している場合に行われる医療です。この医療が日本では非常に数が少なく、病気回復を待ち望んでいる患者の希望に添えていないのです。

脳は知情意を司る大脳、運動を調節する小脳、内臓の調節、伝達を司る脳幹の3つの部分からなり、脳死とはその全ての機能が失われた状態です。薬剤や人工呼吸器によってしばらくは心臓を動かすことができますが、数日後には停止します。脳死は脳出血、脳梗塞、事故による頭部損傷などにより起きることがあります。誰でも脳死になる可能性があります。臓器提供は15～70歳までが可能ですが、心臓は50歳までが望ましいそうです。この医療は前もって様々な検査をした上で、条件が合致する病人に、極めて限られた時間内にしか行い得ないものです。角膜、腎臓移植は1978年から始まったそうですが、その他の臓器移植は1997年からの新しい医療です。心臓移植手術を受けて、命が繋がり、元気に過ごしている女性の喜び、感謝の日々を思うと、この医療が求められているのだと思いました。死んで朽ちていく身体も、医療に役立つことが可能だということが分かりました。

誰にも訪れる死ですが、死を受容するのは悲嘆、苦痛が伴い、すぐに臓器提供ということに思いが至りません。臓器といっても、それは個人に固有の生命体ですから、個人と切り離せないような思いになります。また、臓器移植、臓器売買を巡る黒い噂も耳にします。iPS細胞などの細胞増殖技術によって、難病と言われた病気も治療の可能性が高まっていることを知らされています。まず、この研究が進むことを熱望しています。



誕生日に頂いたブーケの中で、アザミが元気でした。一輪挿しに移して飾ってました。今朝、アザミがとうとう姿を変え、綿毛を撒き散らしていました。散り際にも、自分に与えられた命を次に繋ごうとする力を強く思わせられました。



私たち夫婦も子供が与えられたことで、次世代に命を繋げることはできました。それは私自身にとっては大きな喜びで、感謝でいっぱいです。命の他にも繋げたいことがあります。それらは信仰に生きる平安、平和に生きる喜びです。命を大事にする思いを繋げていきたいです。